日本古典全書第九十八回配本
「太平記」一　後藤丹治校註
昭和三十六年八月二十日初版發行
印刷所　大日本印刷株式會社
發行所　朝日新聞社（東京都千代田區有樂町・大阪市北區中之島・小倉市砂津・名古屋市廣小路）
定價　三八〇圓

© 後藤丹治　1961年

目次

解説……三
序言……三
一、傳本の種目……四
二、組織……七
三、書名と成立の問題……九
四、史料的價値……一六
五、文學的性格……一一
六、後世に及ぼした影響感化……一〇
七、傳來と研究……一三
凡例……一七
本文……二一

巻第一……六一
序……六三
後醍醐天皇御治世事付武家繁昌事……六三
天下の大亂―その濫觴と源氏三代―承久の亂と北條氏の仁政―公家對武家―北條高時の暴逆―後醍醐天皇の御聖德
關所停止事……六六
新關の停止―元亨の飢饉に窮民を救ひ、記錄所にて訴訟を聞召さる―著者の批評
立后事付三位殿御局事……六七
藤原禧子立后、寵なし―三位殿の局、寵を專らにす
儲王御事……六九
皇子十六人―第一の宮尊良親王―第二の宮―第三の宮―第四の宮
中宮御產御祈之事付俊基僞籠居事……七一
關東調伏の御祈―仰せ合はせられし人々―藤原俊基僞つて籠居し、諸國を廻る
無禮講事付玄慧文談事……七三
無禮講―玄慧法印を請じて、昌黎文集を講義せしむ―韓昌黎の故事
賴員回忠事……七六
土岐賴員、妻に密事を語る―妻これを父齋藤利行に告ぐ―賴員の變心―六波羅勢の謀―山本時綱、土岐賴貞を討つ、賴貞の切腹―小串範行、多治見國長を討つ、小笠原孫六の奮戰、國長の自害
資朝俊基關東下向事付御告文事……八三
東使上洛して資朝、俊基を捕ふ―資朝、俊基鎌倉に送らる―御告文を高時に賜ふ―齋藤利行御告文を讀んで暴死す―俊基の赦免、資朝の流罪

巻第二……八九
南都北嶺行幸事……九〇
東大寺、興福寺行幸―比叡山行幸、大講堂供養、津守國夏の詠歌―行幸の理由、護良親王の御武藝

僧徒六波羅召捕事付爲明詠歌事……九二
御企、武家方に洩れ圓觀等捕へらる—二條爲明和歌の徳によつて嗷問を免る—著者の批評
三人僧徒關東下向事……九五
忠圓、文觀、圓觀の高徳—鎌倉への下向—文觀及び忠圓の白狀、圓觀奇特を現じ、嗷問を免る—文觀等の配流—波羅奈國の沙門の例
俊基朝臣再關東下向事……一〇〇
俊基關東に送らる—道行文—俊基鎌倉に下着して押籠めらる
長崎新左衞門尉意見事付阿新殿事……一〇三
持明院殿方の人々—長崎高資と二階堂道蘊との論爭—阿新、父資朝を尋ねて佐渡に下る—阿新、佐渡に到着、本問入道、父子の對面を許さず—資朝斬らる、阿新父の仇を討ち、山伏に助けらる
俊基被レ誅事幷助光事……一一四
法華讀誦の大願—後藤助光、北の方の御文を賜ひて鎌倉に下向す—助光俊基に對面す、俊基の死—北の方及び助光の出家
天不怪異事……一一八
兵火と大地震—東使上洛、護良親王の奏聞、笠置への出御
師賢登山事付唐崎濱合戰事……一二一
師賢臨幸と稱して叡山に登る—六波羅勢叡山に發向す—天皇方の軍勢—兩軍唐崎の濱にて合戰す—六波羅勢の敗北
持明院殿御二幸六波羅一事……一二七
後伏見天皇等六波羅北の方に入御
主上臨幸依レ非二實事一山門變儀事付紀信事……一三八
臨幸僞りなるにより大衆離反し、師賢笠置に移る—尊澄法親王及び護良親王、叡山を落ちさせ給ふ—漢楚の故事との比較論

卷第三

……一三三
主上御夢事付楠事……一三四
天皇、武士の參る者稀なるを憂ひ、御夢を御覽あらせらる—御夢に對する御解釋と楠木正成—正成の參上とその勅答
笠置軍事付陶山小見山夜討事……一三七
幕府の軍勢、笠置城に向ふ、高橋又四郎の敗走—幕府の軍勢、笠置城を攻む—足助重範の奮戰—楠木正成及び櫻山四郎入道の擧兵、高

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

時二十萬の大軍を遣して、笠置城に向はしむ—陶山、小見山先懸して城中に忍び入り、火を放つ、城遂に陥る
主上御ニ沒落笠置ニ事……一四八
天皇藤房等二人を隨へ、笠置を逃れさせ給ふ、御和歌—深須入道等の手に移り、南都に入らせらる—生捕られたる人々—宇治平等院に行幸、六波羅へ入御、御和歌—生捕りの人々を諸大名に預く、神器を渡さる、光厳天皇の御踐祚
赤坂城軍事……一五四
東國より上れる幕府の軍勢、轉じて赤坂城に向ふ、正成、初度の合戰に勝つ—釣塀の奇計—熱湯を注いで寄手を惱ます—正成將士を諭し、城を捨てて走る、觀世音菩薩の靈驗により危難を免る
櫻山自害事……一六二
櫻山四郎入道、備後一宮の社壇を燒きて自害す—櫻山が一宮を燒きたる理由

卷第四

笠置囚人死罪流刑事付藤房卿事……一六六
東使上洛、人々に對する處刑を定む—足助重範を斬罪とす、萬里小路宣房の悲嘆—源具行を近江柏原に斬る—殿法印良忠を六波羅に訊問す、六波羅の評定—平成輔等の處刑—師賢を下總國に流す—藤房を常陸國に流す、左衛門佐局との別離—按察大納言公敏等の處刑
八歳宮御歌事……一七四
第九の宮と中御門宣明との問答、その御和歌、人々を感動せしむ
一宮幷妙法院二品親王御事……一七六
尊良親王、土佐に遷させらる—尊澄法親王、讃岐に遷させらる、尊良親王との和歌の贈答—配所への御到著—後醍醐天皇を隱岐國に遷し奉らんとす……一七五
俊明極參内事……一七八
俊明極との御法談、天皇に對する俊明極の豫言
中宮御歎事……一八〇
中宮、六波羅の御所に行啓、天皇との御對面、その御和歌
先帝遷幸事……一八一

隱岐國への御出發―道中における御感懷、見尾の湊へ御到着
備後三郎高德事付吳越軍事……一八三
高德の計劃成らず、院庄に於て櫻樹を削つて詩を題し、志を述ぶ―詩の來歴、吳越兩國の爭ひ―越王勾踐、范蠡の諫を聽かず、吳國を擊つ―越王勾踐、會稽山に圍まれ、吳王に降る―勾踐、姑蘇城に禁獄せらる、范蠡、魚書を送る―勾踐、石淋を嘗め、國に歸ることを許さる―勾踐の歸國、西施を吳王に獻ず、西施と勾踐との別離―吳王、西施の色に迷ひ、國亂る、伍子胥の忠死―范蠡、吳王を擊つて、これを殺す―范蠡、萬戶侯たることを辭して、五湖に遁る―天皇、隱岐國に御到着、配所における御動靜、太平記著者の批評……二〇五

卷第五

持明院殿御卽位事……二〇六
光嚴天皇の御卽位、當今奉公の人々
宣房卿二君奉公事……二〇七
光嚴天皇、日野資明を使として、萬里小路宣房を召さる、宣房の返答と參仕
中堂新常燈消事……二〇九
山鳩、新常燈を消し、鵰に喰ひ殺さる―新常燈の來歴
相摸入道弄二田樂一幷鬪犬事……二一〇
高時、新座、本座の田樂を愛翫す―ヨウレボシの怪異、儒者仲範の批判―高時、鬪犬に耽溺す
時政參二籠榎嶋一事……二一三
北條氏の九代を保てる理由―江島靈驗譚、三鱗形の家紋の由來
大塔宮熊野落事……二一四
按察法眼好專、宮を般若寺に攻む、經箱に隱れ、危難を遁れさせらる―熊野に向はる、道行文、切目の王子の示現、十津川に御到着―戶野兵衞、竹原八郎の忠勤―十津川を御出發、錦旗を芋瀨庄司に與へ、敵地を脫せらる、村上義光、錦旗を奪ひ返す―玉置の庄司、宮を阻む、片岡八郎の討死、庄司の軍勢、宮を包圍す―野長瀨兄弟、宮を救ふ―宮の御感、北野天神の靈驗

巻第六……二三一
民部卿三位局御夢想事……二三三
後醍醐天皇方の舊臣、宮女の悲嘆―民部卿三位局、北野神社に祈り、示現を蒙る
楠出二張天王寺一事付隅田高橋幷宇都宮事……二三五
時益、仲時兩六波羅に補せられ、上洛す―正成の舉兵、湯淺定佛の城を陷る―正成軍を渡部の橋の南に進め、隅田、高橋と對陣す―渡部の橋の合戰、正成の勝利―兩六波羅、宇都宮治部大輔をして楠木勢に向はしむ―正成、宇都宮兩名將の驅引、天王寺における兩軍の交替―正成の軍勢、漸く強大となる
正成天王寺未來記披見事……二四四
正成、住吉神社に參詣し、天王寺に詣で、未來記を見る―記文に對する正成の解釋―太平記著者の批評
赤松入道圓心賜二大嶽宮令旨一事……二四六
圓心の家系、人物、令旨により兵を擧げ、武威を振ふ
關東大勢上洛事……二四八
關東より上洛の人々、諸國七道の軍勢、京都の内外に充滿す―八十萬騎を吉野、赤坂、金剛山に向はしむ、長崎惡四郎左衞門尉の行裝、人目を驚かす
赤坂合戰事幷人見本間抜懸事……二五一
阿曾彈正少弼、赤坂城に向ひ、天王寺に逗留す―人見先驅けして、途に本間に會ふ、共に赤坂城に赴き、討死す―本間の子息資忠、父の後を追ひ、赤坂城に向ひ、戰死す―上宮太子の御前の石の鳥居に題せる人見等の和歌―阿曾彈正少弼、赤坂城を攻む、城陷らず―城中の水を絶つ、城兵困却す―城兵、寄手に降る、六波羅に送られて斬らる

補註……二六三

太平記

一

後藤丹治

解　說

序　言

戰記物語は戰爭を主な素材とした、敍事的な文學作品の總稱である。これは元來、平安朝の歴史物語や說話物語の系統を引いたもので、和漢の故事を列敍し、挿話に富むと共に、一般に悲劇風な歴史上の事件を採つて、團體と團體との抗爭を取扱ひ、且つ概ね音樂的に語るやうにできてゐる。作者は大抵不明で、その原作は數多くの後人の手によつて加筆され、內容が漸次に成長發展し、ために種々の異本を生んでゐる。一個人の作品といふよりも、むしろ民族的、集團的な意味を多分に持つもので、和漢混淆の新文體を驅使したことも、その大きな特色である。

この種の作品の萠芽としては、古く將門記や陸奥話記があり、また今昔物語中の戰爭關係の記事もその先驅であるが、獨立した戰記物語としては、鎌倉時代のはじめに保元、平治物語が出で、また平家物語が出現した。更にこの太平記や、その變形としての曾我物語、義經記がこれに次ぎ、戰記物語の發達は正に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

頂點に達したかに思はれたが、明德記以下の群小軍記に至つては記錄風のものが多く、文學的な價値は甚だ乏しくなつてゐる。

以上の如き一聯の作品群の中に於て、太平記四十卷は、分量よりするも中世文學史上の一鉅觀であり、ひろく歷史、文學の兩方面に亘つて、幾多の興味ある問題を含んでゐるのである。

一、傳本の種目

はじめに傳本の種目について述べる。

江戸時代、太平記の傳本を蒐集し、これが研究を試みたのは、水戸の參考太平記である。すなはち修史に資するため、水戸光圀がその儒臣今井弘濟、内藤貞顯に命じて、編纂せしめたものである。西源院本・毛利家本・金勝院本・今川家本・北條家本・南都本・天正本・島津家本・今出川家本等の異本の内容を調べて、その記事の異同を考へ、且つそれを當時の記錄文書類に對照して、史實の批判を加へてある。元祿二年成り、四年二月刊行された。「吳越軍事」その他、史學者の立場から省いた所のあるのは、穩當な處置ではないが、江戸時代前期、これだけの成果をあげたのは、功績が大であるといはねばならぬ。この參考本以外では、わづかに劍卷は太平記に附すべきだとした楓軒偶記（小宮山昌秀の隨筆）の說や、曲亭馬琴が玄同放言で太平記の類版の多いことを述べ、岡本保孝が難波江（卷五上）で刊本、末書等をあげ、天野信景の鹽尻（卷二十八）・小野

竹叢の溫故隨筆・神澤貞幹の翁草（卷百二十二）で古本卷二十二の缺脱に注意してゐることなどが目につく位で、この方面ではこれといふ研究はなく、明治時代に入つた。

この時代に入ると、西村兼文は續群書一覽や西村隨筆で、天文本太平記のことを說いてゐるし、また「しがらみ草紙」第五號には中野芳溪の「書二吉川元春手寫太平記後一」が出で、「國文學」第五十四號（明治三十六年五月）には近衞元公爵家から京大圖書館に寄託せられた今川家本の紹介の記事が掲載されたが、これ等はあまり世間に反響はなかつたやうである。しかるに明治三十二年、「史學會雜誌」で、重野安繹博士が「太平記の古寫本」と題し、神田孝平氏所藏の本を學界に紹介し、更にその神田本が明治四十年十一月、國書刊行會の手によつて活版に附せられてから、世人は參考太平記所收の異本以外、重要な傳本のあることを知つた。その頃、山田孝雄博士の平家物語考が發表され、平家物語の本文批判的研究が大きく進められたのに刺戟されたためもあらう、太平記の傳本についても、研究の機が漸く熟して、最初に學問的、組織的な調査を遂げた學者は高木武博士であつた。（日本文學大辭典 日本精神と日本文學）高木博士に後るること數年、龜田純一郎氏も岩波講座「日本文學」所收の「太平記」で、同じく詳細な諸本の研究を載せ、この方面における一つの礎石を置いた。その後、西源院本が鷲尾順敬博士の手で刀江書院から刊行（昭和十一年六月）されたり、吉川元春自筆本の價値が、瀨川秀雄博士、山岸德平氏によつて發見（瀨川博士著古川元春參照）されたりしたこともあつて、太平記の異本に關する國文學界の興味は益ゝ加はるかに思はれた。そして戰後、高橋貞一氏は高木博士や龜田氏の

成果を繼承して、一段と精到な研究報告を發表された。同氏の研究報告は「國語」（昭和二十八年九月）所載の「太平記諸本の異同について」、「西京高等學校研究紀要」第三輯、第五輯所載の「太平記諸本の研究」正續兩篇がすなはちそれである。

今、前記の高木博士、龜田、高橋兩氏の研究調査をもとにして、太平記傳本の種目を略述すると、現存の古寫本には神田本、西源院本等、異本系統のものが多く、これ等の異本系統に對して、流布本形態の古寫本もある。この太平記の多種多樣の傳本は卷二十二を立てない本と、それを立てる本とに二大別される。卷二十二を立てない本は同卷が缺けたまま舊い形を殘した本であり、本文の改竄も比較的すくない。神田本・西源院本・南都本・内閣文庫本・今川家本・寶德本・相承院本・京大本・豪精所藏本などがこれに屬する。卷二十二を立てた本は卷二十二以下の卷のわけ方、段の順序の變改によつて、既に失はれた卷二十二を形式的に補つた改竄本であつて、本文にも改補を施した點が多い。天文本・毛利家本・天正本・野尻本・梵舜本・神宮文庫本・流布本などはこの方である。故に卷二十二の有無や改竄の多少といふことが、太平記傳本の舊形であるかどうかといふことの標準となる譯である。ただし何故に卷二十二が缺けてゐるかについては理由はよくわからぬが、永正の頃、中御門大納言宣胤が三富宗觀から借りた太平記も卷二十二が闕卷となつてゐた（宣胤卿記永正十四年八月一日、十五年七月廿八日の條）のであるから、それは相當早くからのことであつた。

流布本は上述の如く卷二十二を補つた改竄本であるが、永く世間一般に弘布されてゐたといふ點で、他

の異本よりも對社會的に多分に意義を持つてゐる。そして江戸時代に出た版本は、三十種に近い程あるが、これには古活字版と整版との二類がある。古活字版では、慶長七年または八年刊本が古く、整版本ではこの古典全書が底本とした元和八年杉田良庵刊行のものが最も古い。明治以後の活版本では日本文學全書（明治廿四年）・續帝國文庫（明治三十六年）・國民文庫（明治四十三年）・國文叢書（大正二年）・有朋堂文庫（大正三年）・校註日本文學大系（大正十四年）といふやうに各種の叢書類に收められたり、或は太平記詳解など、註解附きで、愈々世上に傳播して來たが、日本文學全書、續帝國文庫以前、またはそれと相前後して、明治十六、七年に東京同益出版社、東京報告社から、明治廿四年に同盟書房から、それぞれ江戸時代の整版本が飜刻されてゐるのは、明治のこの頃も江戸時代の餘波を受けて、太平記を讀む人が可なりあつたことを立證するものであらう。そして活版本であつて、しかも流布本系統でないのは、國書刊行會の神田本と、鷲尾博士校訂、刀江書院發行の西源院本とである。

二、組　織

太平記は花園天皇の文保二年（西紀一三一八）から後村上天皇の正平二十二年（一三六七）に至るまで、約五十年間の爭亂を記したものである。全部で四十卷、分量からいふと、流布本平家物語の約二倍に相當し、源平盛衰記にもほぼ匹敵すべき厖大な作品である。

この書は普通、三部から成るものとされてゐる。この三部説は日本文學論纂（佐佐木博士還曆紀念論文集）所收の論文「太平記の主想」や校註日本文學大系の解題に載せられた、尾上八郎博士の見解が最初のものであらう。今それにもとづいて説明を加へると、第一部は後醍醐天皇の關東誅伐の御企てから建武中興まで、卷數からいふと卷一から卷十一あたりまでである。第二部は卷十二から卷二十まで、足利尊氏の謀叛、足利勢と勤王諸將との戰鬪、楠木正成、新田義貞の戰死のこと等から足利幕府の基礎が確立することに及んでゐる。第三部は殘りの卷二十一から卷四十に至る。足利幕府に内訌が絶えないで、これに對して吉野方との間に交渉があり、爭亂相繼ぐ狀態を描寫し、最後に足利義滿が將軍となり、細川頼之が執事職に任じ、中夏無爲の代になることに終る。この三部の區分は勿論整然たるものではなく、その間に明確な境界線を劃することは不可能ではあるが、大體から見て、この三部説は認容せられてよいと思はれる。かくいへばとて、この三部がそれぞれ孤立してゐるといふのではない。第一部から第二部へ、第二部から第三部へと相互に連絡を保ちながら、敍事が進行してゐることも併せて認めらるべきである。

しかしながらその第一部たると、第二部たると、第三部たるとに論なく、太平記の全篇を貫くものは戰亂の記述である。まま男女相愛の物語とか、君臣、父子別離の哀話とか、神佛の靈驗譚、怪異譚とか、公事典禮とか、中國、印度の故事とか、その他種々雜多な記事が混入してはゐるが、それ等は多く戰亂の記述に附隨して記されたものであつて、太平記を一貫するものは、實に吉野朝の特殊な時代相としての戰亂

の記事に他ならない。このことは太平記の冒頭に「爰に本朝人皇の始、神武天皇より九十五代の帝、後醍醐天皇の御宇に當て、武臣相模守平高時と云者あり。此時上乖二君之德一、下失二臣之禮一。從レ此四海大に亂て、一日も未レ安、狼煙翳レ天、鯢波動レ地、至レ今四十餘年、一人而不レ得レ富二春秋一、萬民無レ所レ措二手足一」と筆を起し、次に「倩尋二其濫觴一者、匪二啻禍一朝一夕之故一」として、いはゆる四十年間の騷亂の依つて來る所とその狀態とを詳記し、最後に卷四十の末尾に於て、かかる多年の戰亂も細川頼之が執事職に任ずるに及んで止んだと書いて擱筆してゐるのを見ても、思半に過ぐるであらう。換言すれば、太平記は戰亂の由來からその狀態、最後にその終結を詳記してゐるのであり、その內容は戰爭に終始してゐるといつても、過言ではないのである。

三、書名と成立の問題

(一)

一體、戰記物語がどのやうにして出來上つたかといふ問題については、不明の箇所が多い。保元、平治物語もさうであり、平家物語もさうである。これは序言でも述べた如く、戰記物語の本質として、多數の作者、增補者の手によつて、原作に對して漸次に改訂修補が加へられ、さまざまの異本を派生したがためであり、一個人の作といふよりも、民族的、集團的性質を多分に持つがためである。太平記またその例に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com